

イギリス (英国)

派遣期間 2013年4月～2016年3月

ロンドン補習授業校 帰国報告

留萌市立港南中学校
教諭 佐藤 隆司

1 英国について ～歴史と伝統を重んじ自然をこよなく愛する国～

英国は、ヨーロッパ大陸の北西に位置し、北海を挟んでフランス、ベルギー、オランダ、デンマーク、ノルウェー等の国々に囲まれている。大小あわせて約 1000 ほどの島々から構成されていて、大半はなだらかな丘陵地及び平原で占められており、国土のおよそ 90% が可住地となっている。そのため、国土面積自体は日本のおよそ 3 分の 2 (本州と四国を併せた程度) だが、人の住める面積は逆に日本の倍近くに及んでいる。

1675 年、チャールズ 2 世は、遠洋航海に出た船の位置を測るため、ロンドン郊外東部の町グリニッジに天文台を作った。この天文台を通る南北の線を基準子午線と定め、経度の基準を時間の基準とした。各国はグリニッジ標準時 (GMT / Greenwich Mean Time) を基準に、時間を計算する。天文台は現在、別な場所に移動したが、ここは博物館として残され、中庭には記念のモニュメントと、0 度を表す子午線が引かれている。



グリニッジ元天文台(上)と、世界標準時間を表す時計台(左)



(1) 国名

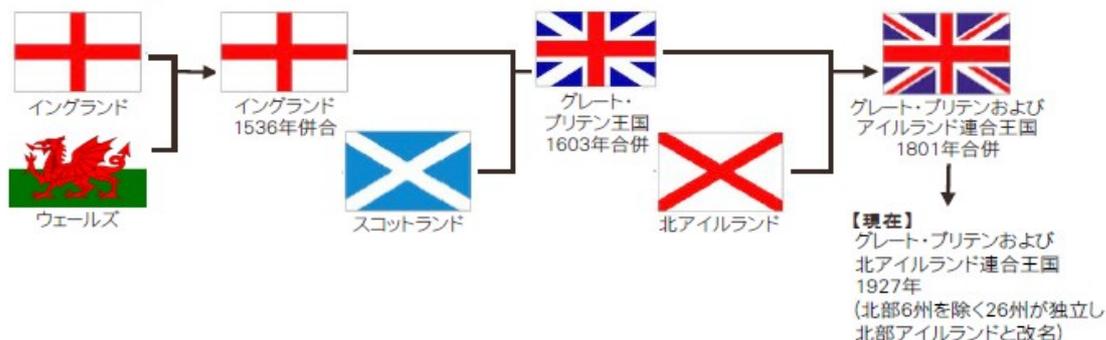
英国の正式名称は、グレートブリテン及び北アイルランド連合王国 (英語: United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland)。

連合王国とは、複数の王国などの同君連合や、複数の国の連合により形成された王国の呼称として用いられる言葉である。つまり複数の国の集まりである。英国は、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドから構成される立憲君主制国家であり、英連邦王国の一国である。グレートブリテンとは、イングランド、スコットランド、ウェールズがあるいわゆる英国本土をさす。

(2) 国旗

英国旗「ユニオン・フラッグ」は、一般に「ユニオン・ジャック」と呼ばれている。艦艇の船首旗竿(jack-staff)に、ユニオン・フラッグを掲げたことに由来する。英国は、4つの非独立国からなる連合王国である。

イングランドとウェールズの国旗は合体しなかったが、その後の合併ではそれぞれの旗を組み合わせて、現在の国旗ができた。



イングランド、スコットランド、アイルランドの旗の紋章は、それぞれの国の守護聖人の十字を表している。それぞれの国で行われる行事やサッカーなどのスポーツでは、これらの国旗で持って応援する。

(3) 気候

英国は、北緯 50~60 度の間にあり、北海道よりも北に位置するため、寒いと思うかもしれないが、メキシコ湾からやってくる暖流と偏西風により温暖な気候となっている（西岸海洋性気候）。冬の冷え込みはむしろ日本のほうが厳しい。雨が多いイメージの国だが、梅雨時の日本の 3 分の 1 ほどの降水量が、ほぼ年間を通して続く。

気候の特徴は一日の天気が変わりやすいこと。英国には日本と同様に四季があるが、一年を通して雨が多いことも天気の特徴の一つ。英国には“一日の中にも四季がある”と言われており、一日のうちにも、日が照りつけたと思ったら、どしゃ降りになって冷え込んだりと、めまぐるしい気温の変化がある。日本の天気予報では考えられないことだが、イギリスの天気予報は、晴れのち曇りのち雨という日が本当に多い。そして、これがまたよく当たる。1 日中雨が降り続けるようなことはめったにないが、1 日のうちの数時間雨が降るようなことが多い。急に雨が降り出したり寒くなったりするので服装や雨具などの用意が大切である。

春や秋は日が暮れるのが早く、気候的に北海道に似ていると感じた。夏は、暑くても 25℃前後で 20℃を超えない日も多い。そういった意味では道東に近いだろうか。ただし、サマータイム真っ只中なので、22 時頃まで明るい日が続く。ロンドンなどのイギリス南部の都市部の冬の気温はさほど厳しくなく、東京の気温ととても似ている。降雪もほとんどなく、年に 2、3 日程度であり、積もることはない。

(4) 英国の教育制度

英国の教育制度を図に表すと下のようになる。もっとも大きな違いは、9 月に新学期が始まること、5 歳の子どもが小学校の reception に通うこと、10 歳に満たない子どもの外出には必ず保護者が同伴するという慣習があること。

をしていることからふだんはチューブという。1863年設置。

- ⑤世界初の超音速飛行機で、旅客輸送サービスを行った。

: 1976年、世界初の超音速旅客機コンコルドが就航した。しかし、老朽化とコスト高により2003年に運行終了となり、その姿を消した。

- ⑥「英国国教」という宗教がある。

: 英国のすべての人が信仰の自由を保障され、70%以上の人々がキリスト教を信仰している。英国国教はキリスト教で、国家の正式教会として法的に認められている。

- ⑦世界の4分の1が領土！という時代があった。

: 18世紀に起こった産業革命、海外進出により形成された英連邦王国によって、英国の領土はピーク時の19世紀後半には、全世界の4分の1を占める大国になった。

- ⑧世界で一番長い名前の駅がある。

: 英国ウェールズ北部に存在する「ランヴァイル・プルグウィンギル・ゴゲリフウィルンドロブル・ランティシリオゴゴゴホ」(Llanfair pwllgwyngyll gogerychwyrndrobwl llantysiliogogoch)という駅。意味は「赤い洞窟の聖ティシリオ教会のそばの激しい渦巻き近くの白いハシバミの森の泉のほりにある聖マリア教会」。なんと58文字！！

(6) 英国が発祥の地のスポーツ

- ① **競馬**: 毎年6月に開催される競馬のロイヤルアスコットレースは、英国王室が主催する世界的なレース。第1回目は1711年に開催され、その歴史は今年で300年になり、エリザベス女王はじめロイヤルファミリーが観戦に訪れる。
- ② **レガッタ (ボート)**: ロンドン中心地からテムズ川沿いに車で1時間弱のところにある街、ヘンリー・オン・テムズ。1839年、ここで世界最古のレガッタ競技、ヘンリー・ロイヤル・レガッタが開催された。
- ③ **テニス**: テニスは現在の形になって、1877年ウィンブルドンで開催された。芝生のコートで行われるこの大会は、選手のユニフォームの色は白色でなければならないとしている。
- ④ **サッカー**: 英国ではフットボールと呼ばれ、近代的なルールを統一させたことから「近代サッカーの母国」と呼ばれている。
- ⑤ **ゴルフ**: ゴルフ発祥の地とされ、毎年7月に開催される「The Open Championship(全英オープン)」は世界で最も古いゴルフトーナメント。
- ⑥ **ラグビー**: 1930年頃、フットボールの試合中に、選手が球を抱えて走り出したのがその始まりといわれている。正しくは「ラグビーフットボール」という。

2 ロンドン補習授業校について

(1) 補習授業校とは

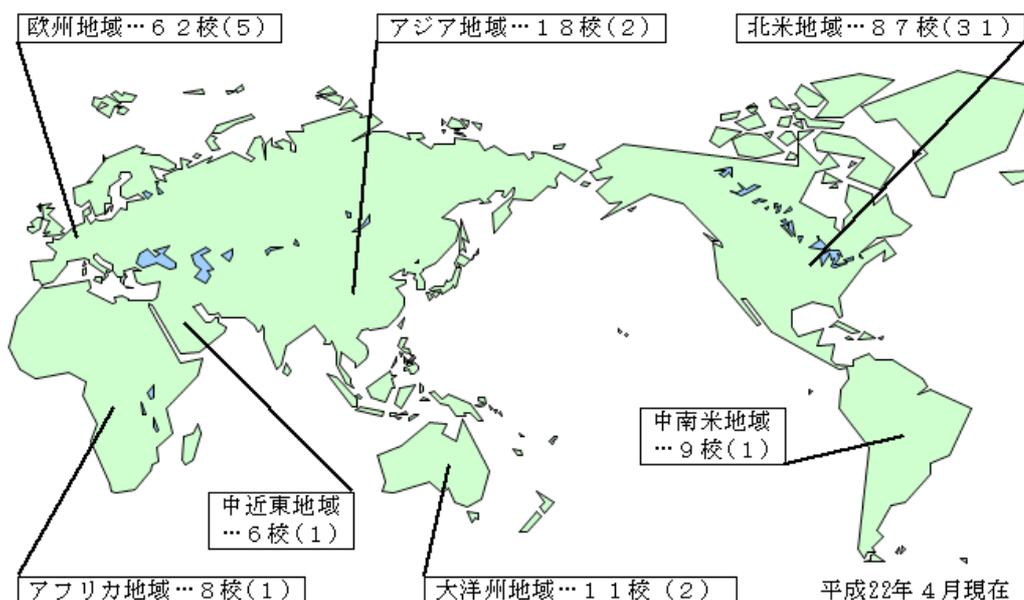
補習授業校は、現地校、国際学校(インターナショナルスクール)等に通学している日本人の子どもに対し、土曜日や放課後等を利用して国内の小学校又は中学校の一部の教科について日本語で授業を行う教育施設である。補習授業校の中には、少数だが、授業時数や授業科目がほぼ日本人学校に準じている補習授業校(いわゆる準全日制補習授業校)もある。

昭和33年にワシントン補習授業校(アメリカ合衆国)が設置されて以来、平成24年4月15

日現在、世界55か国に202校が設置されている。

国語を中心に、補習授業校によっては算数（数学）、理科、社会などを加えた教科について、基礎基本を習得するための授業を国内で使用されている教科書を用いて実施している。年間授業日数は、40日から50日程度のところが多く、教科書の内容を精選して指導している。また、補習授業校では、いろいろな現地校等に通学している日本人の子どもが一堂に会する数少ない機会であることに着目して、日本の学校の学習習慣、生活習慣などを指導し、併せて、日本の学校文化に触れる場を設けているところもある。

◎世界の補習授業校～世界各地の補習授業校の数を示しています。（ ）内は、派遣教員のいる学校。



補習授業校に通ってくる子どもたちは、現地に駐在員として派遣されてきた日本人の子女が大半を占めているが、時代が変遷するに伴って、国際結婚や現地永住などにより、在籍子女の家庭は多様化してきている。こうした中で、日本語力の低下や学習意欲の減退、教室内の学力差などの現象が表れてきていることも事実である。補習授業校が抱えている問題は、複雑かつ解決困難なものも少なくないが、一つ一つ丁寧に対応していくことが必要である。

（2）ロンドン補習授業校の概要

《設置目的》

英国の学校や国際学校に在籍している英国在住の日本人子女に対して、学習指導要領に準じた国語教育を行うことを通して、帰国後の学校生活に順応できる素地を養うこと。

《教育目標》

- 国語をしっかり学ぼう
- 友達と仲良く生活しよう
- お互いの学習成果を認め合おう

《校章》

開校40周年を記念して、2005年に全児童生徒から図案を公募し、それを元に作成。



《あらし》

ロンドン補習授業校は、1965年の日本クラブ主催による「日本語会」としてスタートした。その後、1976年6月に、日本人学校有限会社が設立され、ロンドン日本人学校との併設で再スタートを切った。ロンドンにおける在留邦人の増加にともない、児童生徒も増え続け、1992年には、1831名に達した。現在、700弱の現地校や国際学校に在籍する約1300名の子どもたちが、ロンドン市内やその近郊から通学しており、世界でも指折りの大規模補習授業校として存立している現地校や国際学校に通う子どもたちが、日本的な学校生活を体験できる場として、貴重な役割を果たしている。

《設置学部》

- 小学部 学習指導要領に準じた「国語」の学習を行う学部。
- 中学部 教科書は、「光村図書」を使用。3校舎で設置。
- 高等部…義務教育を終えた子どもたちが、さらに「国語」の学習を深めるための学部。
教科書は、「筑摩書房」のものを使用。アクトン校舎のみ。
- 日本語科…第2母語として日本語の習得を望む子どもたちが日本語の学習を行う学科。
段階別に8学年（各1学級）を設置。アクトン校舎のみ。

《授業日》

土曜日の午前中 9：30～12：15 （講師の勤務時間－9：00～13：00）
年間（4月～3月）…40授業日程度
※夏・冬・春の長期休業は、日本と同様。

◎イギリスの補習授業校<含 アイルランド> (=派遣教員のいる学校)



① 3つの校舎

補習授業校に通学している児童生徒は、ロンドン周辺の広い地域に住んでいる。居住地により通学校舎を決める、「校区制」をとっている。

校舎名 (主な校区地域)	使用校舎 (関係)	学部・学科 ○=学級数	児童生徒数 (2013/5/8)	講師数
アクトン (ロンドン西部)	ロンドン日本人学校 (共用) ※平日(火～金)は、同敷地内の補習授業校事務所で勤務。	小学部…② 中学部…③ 高等部…④ 日本語科…⑧	654名	38 +事務 +司書
ブレント (ロンドン北部)	ホワイトフィールド (現地公立セカンダリーを借用)	小学部…⑯ 中学部…③	452名	24
クロイドン (ロンドン南部)	クロイドン・ハイスクール (現地私立女子校を借用)	小学部…⑩ 中学部…③	229名	15

◎ロンドン市内のポストコードと各校舎の位置関係 (所要時間はアクトン校舎から)



② 実際の仕事内容

ロンドン補習授業校は、土曜日のみ各校舎を開く。補習授業校をあまりご存じない方の中には「補習授業校は、土曜日だけでしょ？平日は、何してるの？お休み？」という質問をされる方がいるが、実際は、日本の公立学校以上に、激務が続く毎日である。火曜日から金曜日までの多種多様な業務の上に、土曜日の授業が成り立っている。

毎週	○教材・教具などの準備	講師から依頼されたものや指導上参考になるもの
	○たよりの作成	<ul style="list-style-type: none"> ・補習校だより…学校だより<校長> ・校舎だより…各校舎の保護者向けの諸連絡<校舎長> ・授業日の連絡…各校舎の講師向けの諸連絡<校舎長>

		・配布物…文芸誌「こんぺいとう」＜担当＞ など
	○各種資料等の印刷	毎週配布する資料や教材の印刷＜現地採用職員＞
隔週	○職員会議	担当ごとに資料作成～提案・討議
	○事例研究会	・授業日の報告…各校舎毎に書面にて記録・報告。 ○報告会 ・各校舎運営上の問題点 ・指導事項や全体に広めていきたい指導事例など。 ○研究会 ・講師研修会に向けて、「研究テーマ」を設け、活動。
時期によつて	◆入学説明会（月1回）	入学希望者を対象【アクトン校舎にて】
	◆在籍管理（常時）	転出入・出席簿の管理（→現地採用講師と協力して）
	◆行事の企画・準備	全校舎共通のもの…入学式・卒業式・運動会 など 各校舎独自のもの…七夕集会・カルタ集会・習字教室 など
	◆代講採用面接（随時）	代行講師採用のための面接・合否判定
	◆研修会準備・運営（随時）	下記3種類の講師対象研修会の計画・準備・運営 「全体研修会」1・2学期が始まる1週間前（原則） 「中間研修会」1・2学期中頃（各校舎ごと） 「反省会」3学期終わり頃（各校舎ごと）
	◆教科書（4月・9月）	全教科の教科書の仕分け・配付
	◆予算関係（常時）	計画～執行（事務長との連携）
	◆学級数策定（2学期～）	毎月の入退学の動きをもとに、新年度の在籍数を予測 →3学期、保護者にアンケート調査を実施→決定
	◆担任の配置（3学期）	確定した学級数により、新年度の担任人事を決定
	◆運営委員会（月1回）	毎月末の火曜日＜校長・事務長＞
	◆現地校訪問（年2回）	現地の学校や教育機関を視察し、文科省に報告
	◆英国研（年1回）	英国内の派遣教員のいない補習授業校の研修会に講師として参加 （毎年1名：おもに校長）
	◆巡回指導（年1回）	英国内の派遣教員のいない補習授業校の指導
◆授業料の管理	授業料の振込確認や督促状等の作成＜現地採用職員＞	
毎週土曜日	○校舎運営	担当校舎の設営（解錠～教室・職員室準備～施錠等）
	○授業参観・指導・助言	「補習授業校派遣教員のもっとも大事な仕事です！」
	○行事運営	入学式、卒業式、その他各種行事の企画・準備・運営
	○保護者活動の支援	保護者活動（学級委員の会）のためのさまざまな支援 たより等の印刷、連絡網の作成等 ～校舎事情によって違いあり
	○報告会	その日に各校舎で起こった様々な事例を報告 ＜校長・校舎長・校長代行＞
	◆教育相談	帰国後の進路や現地校での適応状況等、保護者の相談相手 （臨床心理士を招いて、相談会を実施することも）
	◆校長講話会	校長主催による、保護者向け講話会

管理職的用務から作業用務まで要求される、総合職です。

「笑顔でいること」と「情報処理の的確さ」が常に要求されます。

③ 講師について

補習授業校で実際に教壇に立っているのは、現地採用の講師の先生たちである。講師の中には20年以上も補習授業校で教えている人もいれば、今年採用したばかりの人もいる。また、日本での教員経験のある人もいれば、補習授業校での講師が初めて人に教える経験という人もおり、経歴は様々だし、経験年数にも幅がある。また経験年数の長短にかかわらず、講師としての力量には差があるのも事実で、その指導も必要となる。

補習授業校の授業は、通常の指導書にある年間計画をやろうとしても時間が足りないので、年間40回の補習授業校用指導案集（文部科学省作成）に基づいて行っている。基本的には、一斉授業の形態をとることが多いが、TTなどの指導形態で進めることもある。また、校舎長に授業の依頼がくることもある。

講師の中には、学級担任をしない「校務」と「養護」を担当する人がいる。校務は、校舎長のサポート役としての位置づけだが、TTなどを積極的に行っている校舎もある。養護は、日本の“保健の先生”的な立場で、具合が悪くなった子どもたちの応急処置を行っている。ただし、免許を有しているわけではなく、処置の範囲はかなり限られている。

このように様々な立場、背景、経験をもった講師を束ねていくことが、派遣教員に求められている。また、すべての講師に、「教員としての資質の向上」「授業力の向上」を促すため、授業前のミーティングや授業参観後に指導助言を行う。研究授業や研修会等を通して日々の研鑽にも努めていく。さらに、講師向けの間接支援として、参考資料等の作成も行う。時間的な制約（講師の勤務時間は土曜日の9時から13時）があり、講師の研修がなかなか思うように進まないのが悩みの種である。

また、その本務を全うするためには、派遣教員自身もレベルアップを図る必要がある。そのため的手段として、事例研究会を行ったり、現地校を訪問したりしている。そこで培ったものをいかに講師に還元していくか、講師の立場を尊重しつつ、お互いの信頼関係をどのように築いていくか、どれだけ計画的に研修を進めていけるか等々、派遣教員の職務は多岐に渡っている。

④ 保護者との連携

実際に教壇に立つのは現地採用講師だが、管理職の仕事や事務的な仕事、作業用務の仕事など校舎運営のすべてを取り仕切るのが派遣教員の主な仕事である。土曜日にしか登校しない児童生徒、そして講師。この日にすべてのことをこなすためには、事前に十分な準備が必要である。

また、通常土曜日は、派遣教員が校舎長として一人で校舎を切り盛りする。一人で校舎のすべてに目を配るのは、至難の業である。そこで、「補習授業校は保護者の要望でつくられた学校」という本校設立の原点を生かし、全保護者に、ボランティアとして各種校舎運営に協力をお願いしている。主な仕事内容は、校舎内の安全管理や図書室の運営などである。季節ごとの行事（運動会や七夕集会など）にも、保護者ボランティアは欠かせない。また、校舎によっては、運動会を企画から携わり、保護者の手で運営しているところもある。保護者の補習授業校に対する関心は、日本とは比べようもないほど高く、保護者はたいへん協力的である。そのため、日頃から学級委員の会（保護者の会）との連絡を密にしておき、協力体制を確立しておく必要がある。

学級委員の会は、どの校舎でも各学級から学級委員を選出し、学期に1回総会を行い、いろいろな取り決めをしている。総会には、校舎長も副委員長として、出席する。また日本人学校有限会社の各校舎担当の運営委員が出席することもある。

3 巡回指導報告

補習授業校派遣教員の仕事の一つに、「巡回指導」がある。これは、派遣教員のいない補習授業校を訪問し、講師の指導力向上のための指導を行うものである。昨年度行った巡回指導について報告する。

(1) 巡回指導の対象とした児童生徒の学習状況等について

マンチェスター日本人補習授業校は、在籍数100名程度の学校規模であり、高学年になるにつれ人数が少なくなる傾向にある。クラスの構成は、高学年になるにつれ永住家庭、長期滞在家庭の割合が高くなり、国際結婚家庭の割合も高くなる傾向がある。そのため、日本へ帰国することを予定している児童生徒とそうではない児童生徒との学力差が大きい。今回、小学6年生から中学3年生までの授業観察を行ったが、発言回数の差も顕著であり、学力の高い子たちを中心に授業が進められていく状況であった。

(2) 教育指導の目標設定について

今回の巡回指導の課題は「デジタル教科書の効果的活用」と「学力差に応じた授業づくりおよび指導技術の向上」であった。今回は指導教員が2人だったため、後述の課題をもう一人の指導教員が担当し、前述の課題を私が担当することとした。

マンチェスター日本人補習授業校では、中学部においては昨年度から、小学部においては今年度から指導者用デジタル教科書を導入している。講師の先生方は使用経験年数が浅いことから、「デジタル教科書の効果的活用」について、その基本的な考え方や具体的な活用例を示すことで、課題解決を図ろうと考えた。

そこで、まず先生方がデジタル教科書を使用する際にどういった視点で授業づくりをすればよいかなどといった基本的な知識を身に付ける必要があると考え、「教育指導の目標」を「デジタル教科書の効果的活用について役立つ情報を提供し、実践力向上を図る」とした。

次に「目指す教師像」を 1「デジタル教科書の活用に関する基本的な知識をもった教師」 2「デジタル教科書の効果的活用を工夫できる教師」 3「デジタル教科書の活用に関して互いに情報共有できる教師」とし、デジタル教科書を活用した授業づくりの基本について指導した。

なお、今回の巡回指導において、直接児童生徒を指導する場面がないことから、「目指す児童生徒像」は設定しないものとした。

(3) 指導計画の概要

「具体的な教育指導」としては、目指す教師像と現状とのギャップを埋めるために、講師の先生方に「デジタル教科書の活用とその教育効果」「実際の活用場面」「授業づくりの手順」を示し、今後の実践に生かしてもらうこととした。

そして、本巡回指導において基本目標を実現したと言える「達成目標」を「それぞれの講師が、デ

デジタル教科書の効果的活用について知識を深め、今後の実践における見通しをもつことができる」とした。また、その「達成基準」については、「それぞれの講師がデジタル教科書の教育効果を理解したうえで、実践してみたいと思う活用の仕方を見出すことができる」と設定した。

(4) 指導方法と内容

上記の達成目標を達成するために、「デジタル教科書の情報提供」の時間にプレゼンテーションを行った。資料作成においては、「教育の情報化に関する手引き（文科省）」や「学びのイノベーション事業～実践研究報告書（文科省）」をはじめ、様々な文献を調べ、提供する情報の選定作業を行った。

プレゼンテーションの中では、「授業の中でデジタル教科書を活用することによる教育的効果」「学習指導要領総則および解説総則編におけるデジタル教科書の位置づけ」「単にデジタル教科書を使うことが教育効果を上げるのではなく、どう活用するかといった教員の指導力が教育効果を生むこと」「デジタル教科書でできることの確認」「活用の実際の紹介」「授業づくりの手順」「デジタル教科書使用における留意点」「ブレント校舎の実践」について、話をした。

これらの指導を通して、マンチェスター日本人補習授業校の講師の方々にデジタル教科書の活用に関する基本的な知識を深めてもらうことができた。また、様々な実践を紹介することにより、今後の実践における先生方の工夫の幅が広がったのではないかと考える。そうした意味では、「達成基準」である「それぞれの講師がデジタル教科書の教育効果を理解したうえで、実践してみたいと思う活用の仕方を見出すことができる」については、達成できた。

しかしながら、先生方は前述したように使い始めてからまだ日が浅いため、毎授業において試行錯誤の段階である。今後は、どのような教育効果を狙うかを意識しながら、工夫を凝らした実践を積み上げていくとともに、三つ目の「目指す教師像」でも触れたように、それらを講師間で情報共有してマンチェスター日本人補習授業校の財産としていくことを期待する。

(5) 巡回指導を終えて

今回の巡回指導では、もう一つの課題である「学力差」についての質問もたくさん受けた。これはどの補習授業校も抱えている大きな課題である。授業観察後の個別指導では、「学力が低い子にどう活躍の場面を与えるか」「活動に意味を持たせる（意欲づけを行う）展開の工夫」「レベルをどこに合わせるか」「子どもの思考をうまく導く支援の仕方」などについてアドバイスをさせていただいた。また、海外に暮らす子どもたちにとって、「画像、映像、音声教材」がとても有効であり、知識の定着や言葉や教科書に書かれていることに対する理解を深めたり、イメージを膨らませたりすることに大変効果的であることを講師の先生方と再確認した。

最後になるが、マンチェスター日本人補習授業校の講師の方々からは、とても熱意を感じることができた。その一つとして、教材研究の素晴らしさがあった。また、運営委員会の方々からは、より効果的な授業が行われるための様々な取り組みや、反対に運営上の悩みをお聞きすることができた。海外という特殊な環境、そして、二つの言語を使って学習を進めていくというとても困難な状況の中で学習をしている子どもたちのために、少しでもわかる喜びを伝えようとする先生方、運営委員会の方々の姿に勇気づけられ、また元気をもらった気がする。同じ補習授業校に携わる者として、今後も様々な情報を共有できる仲間として、関係を継続できたらと願っている。

4 現地校訪問報告

現地の教育事情や学校運営、学力向上のための取組などを知り、派遣教員の資質向上を図る目的で年に1、2回現地の学校を訪問する研修を行っていた。その報告をする。

(1) はじめに

イギリスにおける教育は、日本人学校のような各国独自の教育課程を実施する学校を除いて、大きく三つに分けられる。その三つとは公立学校・私立学校・インターナショナルスクールである。その中でも公立学校は、さらにいくつかの種類に分けられる。今回は、アカデミーと呼ばれる種類の学校を訪問し、その学校の特色を探ることで、イギリスにおける現地教育事情の理解を深めた。

(2) 公立中学校（アカデミースクール）の特色

<訪問校：Burlington Danes Academy> 訪問日：平成27年12月2日（水）

◎Burlington Danes Academy の概要

Burlington Danes Academy はロンドン西部に位置し、学校の所在地域は決して裕福ではなく、貧困層の家庭が多く住んでいる。その影響もあってか数年前までは問題行動も多かった。しかし、現在はイギリスの Ofsted（学校評価）においてほとんどすべての分野において最上級の評価を受けるようになった。今回は、その立て直しに至った経緯や最高評価を維持している教育理念や具体的な取り組みについて学校長から質問形式で回答を得た。



○立て直しの経緯に関することと学校を運営していくうえで最も大切にしていること

①教えること

②子どもたちも含めた行い、行動

③いい教育を受けているという自信、信頼

- ・この3つが合わさらないと学校はよくなる。
- ・入学希望者が多く、定員180名に対して第2、3希望まで合わせると600名以上の応募がある。
- ・昔は、貧しい家庭が多く、その多くは家庭が壊れてしまっており、家庭に教育力がなかった。学校教育の位置づけも低く、学校に対する理解もなかった。（ここは地域の学校であり、遠くに住んでいる人は基本的に入学させていない。地域的に裕福ではなく、66%はフリーミール、つまり学校が朝と昼の食事を提供しなければならない家庭の子が在籍している。）
- ・学校教育の大切さや学校の教育方針を理解してもらうことが難しく、そこに保護者を取り込んでいくことが難しかった。
- ・教員の質も高くはなく、指導力不足の教員もいた。
- ・だから、とても大変だった。しかし、保護者に学校に関心をもってもらうようにしながら上記の3つのことを推し進めることで、改善へと向かった。



○宗教上の問題に関して

- ・学校はチャーチ・オブ・イングランド（キリスト教）の学校だが、ムスリム（イスラム教徒）が40%在籍する。当初は、宗教の対立が少なからずあった。キリストの教えに対応していない子もいたが、そういう子はスタッフが気をつけてみていった。今は、宗教対立はない。
- ・入学前には、ここはカトリックだということをしっかり認識させている。
- ・モデレートな形でいるとここに溶け込んでくれる。そういう形にしたい。

○保護者対応

- ・ちょっとしたものはあるが、大きなものはない。
- ・コンタクトを取ることを重視している。連絡は、普通悪いことをした時が常だけれどもいいことをした時も連絡するようにしている。

○先生方への指導

- ・自主研修をしている。外に出ての研修ではない。木曜の夜にグループで研修を実施。能力のある先生たちがリードして教えていく形式。
- ・校長が、足りないと思うところをそのグループに行って補うように指示することもある。
- ・いい教師をリクルートするのも難しい、さらに学校にとどめておくのも難しい（注釈：イギリスでは校長が教師をヘッドハンティングする）。教師はストレスがたまる仕事である。そこで、年に3回ほど先生方を楽しませるようなイベントを設けている。また、週に25コマ以上持たせないようにしたり、一日に2コマは最低空き時間を作るようにしている。

○問題を起こした生徒への対応

- ・怒ることだけではなく、報償を与えることにしている。
- ・段階に応じて。金、土、日と居残りをさせている。
- ・程度が重い時には、6週間の更生プログラムを実施。リハビリセンターが校内にある。これは、普通クラスから取り出し、通常の学習を行うとともに感情のコントロールの仕方を学ぶ。最終的にはクラスにもどることを前提としている。合わない時は違う学校の選択肢も与える。一度に6名まで対応可能。

○生徒指導

- ・前述のとおり学校周辺の地域はあまりいい環境ではない。学校から一歩外に出ると、服装等に関しても規律がない状態である。そういった“外”のものを学校の中に入れないうために、毎朝プレイグラウンドで服装等のチェックをしてから学校に入れるようにしている。
- ・すきだ貧しい居住区から通学している子もいる。学校が、そういう子たちの憩いの場になり、ゆっくり勉強してもらおうように心がけている。犯罪者が住んでいたところに帰っていく子もいるので、子どもたちのケアをしていく必要がある。
- ・「学校を中心に地域をよくしていこう」と考えている。
- ・自分たちがモデルとなって、それはよくないことだと知らしめられるような生徒の育成に努めている。そのために生徒同士に話し合いをさせている。ルールやポリシーがあるからといってよくなるわけではない。心の育成が大事。
- ・週に2回集会を開き、ためになる話を聞かせている。
- ・映画ハリーポッターでそうあるように、いくつかのグループを作り、スポーツやディベート、



チャリティー活動などにおいて競わせている。

- ・注意が必要な生徒は、内面の弱さを持っている。そういう生徒には、ボクシングをやらせ、それを通して自信をつけさせている。
- ・運動をしないことは問題である。だから、運動を取り入れて競わせている。
- ・テストの成績を廊下に掲示し公表している。落ち込む生徒はいないかの問いにいないとの回答だった。それは、励みにもなるし、進み具合も含めて掲示しているので、生徒も単に順位を気にするのではなく、低い順位の子も次の目標を定めることで、全体の底上げにもつながっている。



○いじめへの対応

- ・ルールがあり、いろいろな仕掛けがある。非常に難しい所ではなるが、それを日常的に機能させるため、スクールカウンシルの配置、教員も入ったの生徒会での議論、なだめ役の配置、保護者への誓約書記入の義務などを行っている。イヤー8からは、白黒はっきりさせる。

(3) おわりに

アカデミー校は、公立の学校でありながら教師の給与・待遇、授業カリキュラム、学期期間の設定などで自由裁量を与えられていることから、どの学校も特色ある教育活動を展開している。ここは日本の教育事情とは大きく異なる部分だと思う。そういったことから、よい意味でも悪い意味でも校長の手腕が学校経営に大きく影響する。

Burlington Danes Academy は前述の Ofsted で学力面においても本当に優秀な学校として認められている。しかし、今回、質のいい教師の育成と授業提供ということの話はうかがったが、学力向上についてはそれほど話の中心にならなかった。校長先生の話の中で一番感銘を受けたのは、保護者を学校に巻き込み、子どもたちの心を育てようとするその教育理念である。そして、学校を中心に地域をよくしていこうという考えに、大変共感した。

今回の調査で得た知識、子どもたちに対する考え方、学校経営に対する理念を今後、日本へ帰った後も自分自身の実践の中で生かしていきたい。

5 おわりに

派遣される前は、自分は日本人学校に行くもんだと勝手に思っていた。派遣先がロンドン補習授業校だと通知を受けたときには本当に驚いたのと同時に、大きな戸惑いを覚えた。補習授業校の業務内容とは、いったい何だろうと。

ロンドン補習授業校へは教頭格として派遣され、さらに校舎長として一校舎を一人で任された。補

習授業校の業務をよく問われるが、本当に多岐に渡り、簡単には説明できない。自分が2年目、3年目になった時には新しい派遣教員を迎えるにあたり、事前にできるだけ業務内容を伝えてはいたが、最終的には「来てみなければわからない。1ヶ月くらいしたらなんとなくわかります。」と伝えていた。それだけ、多種多様、そして複雑な業務であった。管理職であり、主事であり、教務であり、生徒指導主任であり、事務職員、公務補であった。振り返ってみると、ありとあらゆる業務をこなしていたように思う。

その中でも、保護者対応、学級委員の会（保護者会）とのつながり、そして、講師への指導（信頼関係の構築）といった仕事は、私に大きな学ぶ機会を与えてくれたと思っている。1週間に1度しか学校がない、学校運営にあたる派遣教員が一人しかいない、という補習授業校の特別な環境の中ではこれらのことが派遣前とは比べものにならないくらい濃密なものであり、同時に貴重な経験となった補習授業校では、こういったことが本当に大切なものであった。日本の学校では、経験することのできなかったものであり、自分の教員としての質を向上させてくれたものと思っている。

補習授業校には、その特殊な環境がゆえにたくさんの課題が山積している。その中の一つが、児童生徒の学力差である。補習授業校には、様々な環境の子どもたちが集まっており、国語を学ぶ目的も様々である。そういった中では、この課題を解決することは容易なことではない。しかし、補習授業校で学ぶ子どもたちは、限られた時間の中で2つの言語を学ぼうとする本当になんぼり屋さんたちである。そして、将来は日本と世界をつなぐ懸け橋となる大切な存在である。今後、彼らが学ぶ環境が少しでも整えられていくことを願っている。

最後になるが、平日に詰めていた事務所は、明るくいつも和んでいた。時には精神的にも肉体的にも辛く大変な時もあったが、事務所はいつも居心地のいい場所であり、仕事への活力を与えてくれたこの場を借りて感謝申し上げたい。

この3年間はとても充実したものであった。私に大きな刺激を与え、私の人生に大きな財産を残してくれた。こうした貴重な経験の機会を与えてくださったすべての皆様に感謝の意を表したいと思う。

